

「子どもの症状の見分け方やその対処」

「熱」〜第4回目

これまで3回にわたって「熱」をテーマに簡単に解説しました。

今回はそのまとめです。

子どもの熱の大半は、心配のないウイルス性の病気です。他の症状が重い場合は別ですが、ほとんどは翌日の受診で十分です。水分・栄養を取って、全身状態の悪化をなるべく避けるようにして、受診させてくださいばよいでしょう。繰り返ししますが、本人が元気であれば、多くの場合それで十分です。しかし、以下の場合は、夜間、医師や看護師を起こしてもいい、十分な理由です。(念のため入院の心づもりで受診してください)

- 熱を下げる手段を講じても子どもがつからそうで、水分もとれない。
- 熱とともに嘔吐を繰り返している。
- 熱とともに激しい頭痛と嘔吐がある。

- 言葉の話せない児で、熱があり、ずっと泣きっぱなし、あるいはぼんやりとしている。
- 熱があり、あごが胸につけられないほど首が硬直している。
- 熱があり、ひきつけを起しました。

- 40.5 以上の熱があり、ぐったりとしている。

また、熱以外の症状のほう

- 激しい咳が徐々に悪化している、胸を痛がる。

- 呼吸が荒く、早くなっている。

以上はあくまでも目安です。子どもたちの症状はたとえ病名が同じであっても一人一人違います。実際の場面で迷う場合は、病院にご相談ください。

「熱」については今回で一区切りとします。次回からは「咳」について触れたいと思います。